

科学研究費助成事業（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	23222001	研究期間	平成23年度～平成27年度
研究課題名	仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集（パウダコーシャ）の構築	研究代表者 （所属・職） （平成28年3月現在）	斉藤 明（東京大学・大学院人文社会系研究科・教授）

【平成26年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準	
A+	当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる	
○	A	当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
A-	当初目標に向けて概ね順調に研究が進展しており、一定の成果が見込まれるが、一部に遅れ等が認められるため、今後努力が必要である	
B	当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である	
C	当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である	

（意見等）

本研究は、主要な仏教用語の用例を精査し、基準となる現代語訳を提示しようとするものであり、組織的取り組みと労力を要する困難な課題であるが、現時点でいくつかの重要な進展があり、研究は概ね順調である。

仏教思想の的確な理解のためには精確な仏教用語の定義と用例の検証が不可欠である。本プロジェクトはそれを徹底的に遂行し、研究は着実に進行している。また、本研究は、インド仏教の中国的変容を見る上でも、日本仏教の教学的展開を見る上でも有益な視点を提供するものであり、本研究の意義は大きい。

なお、研究組織のより一層の有機的連携が今後望まれる。

【平成28年度 検証結果】

検証結果	当初目標に対し、期待どおりの成果があった。
A	<p>従来の日本のインド仏教研究においては、サンスクリット語・パーリ語原典の術語に対応する伝統的漢訳語がそのまま採用されてきた。伝統的な漢訳語の中には「縁起」「無我」など絶妙な適訳も少なくないが、他方では、原意を捉えるのが困難である漢訳語も多く、これらは仏教原典を正確に解釈する上での障害となっていた。近年、仏教用語の現代語訳が進展する中で、研究者間の解釈及び理解力の優劣の相違が訳語の相違に反映され、同一の概念に対して複数の現代語訳が与えられ、研究者間の意思疎通を困難にしてきた。本研究は、こうした問題を克服するために、XML形式（拡張可能なマーク付き言語）に基づいて重要な仏教用語に関して用例・関連文献を整理しつつ、現代語（日本語・英語）への基準的な訳語を検討し提起することを目的として行われた。</p> <p>本研究の研究成果として、斉藤明他（編著）『瑜伽行派の五位百法』（2014）、榎本文雄他（編著）『ブダゴースの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語』（2014）が刊行され、それらの情報がWEB上に公開された。また上記の研究成果の国際学会における発信なども行われている。以上を総合的に考慮すれば、当初の研究目標に対して期待どおりの成果が得られたと判断できる。</p> <p>今後、（1）上記研究の英語版の出版、（2）本研究が対象としたアビダルマ以外の経典・律典の主要概念を対象とする基準となる現代語訳の確定などを行うことが求められる。</p>